

「近代（日本）語」をめぐる

今野真 二

要旨 本稿では、これまで行なわれてきている近代（日本）語研究に関して、幾つかの観点を設定して振り返り、今後どのような研究上の課題が残されているかということなどについて述べた。具体的な話題として、「かなづかい」と「連合関係」とを採りあげた。前者に関しては、「かなづかい」という枠組みの中、すなわち仮名によって語を書くという枠組みの中では、一つの語の書き方を一つに定めない「多表記性表記システム」が看取されるか否かが古代語と近代語とを分けるのではないかという仮説を示した。後者については、室町期の資料にみられる連合関係と同じような連合関係が明治期の資料にみられることを一つのモデルとして示し、「連合関係」がどのような範囲に成り立っているのかという観察が、「共時態」の検証の一方法になるのではないかという仮説を示した。

キーワード…かなづかい、連合関係、漢語

はじめに

昭和三〇（一九五五）年九月に刊行された『国語学』第二二集は「古代語から近代語へ」という特集号として編集されている。今から六十年ほど前のことになる。雑誌の冒頭には、特集に合わせた、濱田敦の「古代語から近代語へ」と題された短い文章が置かれ、巻頭論文として、亀井孝「近代日本語の諸相の成立」が続く。

亀井孝は「古代語から近代語への歴史的展開として、なにが数へられるか」と問いかけ、それに対して自身で「あたらしい文体としての近代日本語の成立と、表現に関する選択の自由の増大とが指摘できる」と述べ、前者については「新しい口語的表現の確立」と言い換え、後者については、その一つとして「漢語の浸透」を挙げている。本稿では、「新しい口語的表現」を、「言語情報」を盛り入れる「器」ととらえ、その「器」には「外装」としての「書き方」も含まれると考え、「外装」としての「かなづかい」を一つの話柄としたい。また「漢語の浸透」ということとかかわり、漢語が日本語の語彙体系に浸透し、何らかの結びつきを形成しているということをもう一つの話柄としたい。それぞれについては後に詳しく説明をする。

日本語の歴史を考えるにあたって、古代語と近代語と二つに分け、過渡期として中世語を設定するというみかたは、現在においてもごく一般的なものといえよう。日本語といっても、音韻的な面、文法的な面、語彙的な面、表記的な面などがあることはいまでもなく、そうしたさまざまな面からみて、おおよそは二つに分けることができる、というみかたであると思われる。

論文や研究発表が話題とすることがらが、六十年前とは比べられないほど限定的になってきている現在においては、その論文や研究発表が大枠としては、近代語研究という枠組みにあるのだろうと推測できたとしても、近代語研究という明確な意識のもとに展開しているかどうか不分明であるものも少なくないように思われる。「室町時代

以降一九四五年までの日本語」を近代語とみたとして、その時期の日本語を観察、分析したものは近代語の研究である、というみかたを否定するつもりはないが、しかし、近代語ということが、何らかのかたちで意識され、観察や分析に織り込まれていなければ、それはごく消極的な近代語研究といわざるをえないのではないだろうか。

粗いみかたであるが、古代語を対置した場合に、そこにはない言語形式があるということが近代語（というみかた）を成り立たせるのであって、自戒をこめてということになるが、そうした古代語との「不連続」が具体的なテーマを採りあげている、一つ一つの論文の視野に入っているかどうか。あるいは、近代語側にたつて、「室町時代以降一九四五年まで」の「連続」が視野に入っているかどうか、ということがやはり重要になると考える。

古代語を対置して近代語を論じることができるのは、両者の「不連続」が顕著である場合であろうから、それが顕著でない場合は、過渡期である中世語との対照によって近代語を論じることがあつてよいと考える。この場合は、顕著な異なりではなく、緩やかな異なりに着目することになる。過渡期として位置づけている中世語が、古代語とも近代語とも異なるのだということが主張できれば、すなわち中世語を中世語として鮮やかに描き出せれば、それは結果として古代語と近代語との違い、「不連続」を描いたことにもなる。このような描き方があつてもよいと考える。

一 室町時代から江戸時代にかけての「かなづかい」

「室町時代から江戸時代にかけての」という表現を使ったが、「かなづかい」に関しては、どのような「かなづかい」がどの程度要求されているかということが、文字社会によって異なることが予想され、通時的にとらえることが難しい。室町時代の文字社会Xにおける「かなづかい」の状況と、江戸時代の文字社会Yにおける「かなづかい」の状況とを並べても、文字社会Xと文字社会Yとの連続性が保証されていなければ、そうした対照から何らかの知

見を引き出すことはできない。手書き、印刷といった文字化の手段の異なりも「かなづかい」に関しては何らかの違いをもたらす可能性がある。ここでは、相当に粗いくりかたであることを承知した上で、「文学作品を文字化したテキスト」であることをテキストの（あるいはそのテキストをうみだした文字社会の）「連続性」の保証としておくことにする。これは安田章が「仮名文字遺序」（『国語国文』第四〇巻第二号、一九七一年、後二〇〇九年、清文堂出版刊『仮名文字遣と国語史研究』再収、引用は後者による）において、「書くことが不可避であったような類の文献、対話に比すべく、要するに既知のことばを文字に表わしただけの、伝達を最大の眼目としたものを、取り上げるべきかと思う」（五頁）と述べたことのいわば「裏返し」の選択といってもよい。

「伝達を最大の眼目」としたテキストと「文学作品を文字化したテキスト」とが厳密に排他的な関係にあるわけではもちろんないが、それでも何程かはそれにちかい関係にあるといえよう。文学作品テキストは、いわば書き継がれてきたテキストなのであって、当然、書写原本¹¹いわゆる親本の「かなづかい」が遺伝することが推測されるが、このことについては、これまでの「かなづかい」分析はほとんど問題にしてこなかったといつてよい。

藤原定家が写した『更級日記』は、なんびとかが書いたテキストを写したものであることは自明のことであろうが、そのことをまったく話題にせずに、藤原定家が写した『更級日記』の「かなづかい」が分析されてきているようにみえる。それは藤原定家の「かなづかい」だという。そのようにみることはできなくはないであろうが、しかしそれでいいといつてよいのだろうか。書写原本がどう書かれていたかは、それを写す、新たな文字化に影響を与えないはずがない。こうした点についても今後考える必要がある。これまで問題にしてこなかったから、ここでも問題にしないということではないが、ここでは書写原本の書き方を積極的に変更しようとしていないだろうという前提をたてておくことにする¹²。今ここでは慶應義塾図書館に蔵されている、室町末期頃の写本と目されている『横笛物語』¹³を採りあげてみることにする。冒頭から五丁分、二五〇〇字程度のデータをもとにして考えてみることに

にする^③。

これまでのかなづかい分析は、「古典かなづかい」に合致しているかどうかという観点からなされてきた。そうした分析方法は、「古典かなづかい」にちかい「かなづかい」が看取される場合、あるいはそれほどかくないにしても、ある程度統一的な「かなづかい」が実行されている場合には有効であろうが、そもそも統一的な「かなづかい」で書かれていない場合などは、結局は「古典かなづかいからほどとおいかなづかいで書かれている」ということになってしまつて、分析の有効性があまりない。そうしたことについても今後は十分に検討する必要があると考える。

屋名池誠「近世通行仮名表記」―「濫れた表記」の冤を雪ぐ―(『近世語研究のパスベクティブ』二〇一一年、笠間書院刊、所収)は「近世通行の仮名表記は、「ヨミが一つに定まりさえすれば、一つの語形に表記がいくつあつてもかまわない」(一五三頁)という、書き方と語形との対応が「多対一」である「多表記性表記システム」(一六七頁)であると指摘した。首肯できるみかたである。ここでは「古典かなづかい」を分析の根底に置いていない。そのことにも注目しておきたい。屋名池誠(二〇一一)が分析対象としているのは、山東京伝『江戸生艶気樺燒』(一七八五年刊)、式亭三馬『浮世風呂』(一八〇九年前編刊)、為永春水『春色梅児誉美』(一八三二年初編・二編刊)などの「近世の戯作」(一五三頁)であるので、本稿で分析対象としようとしている「文学作品のテキスト」と重なっている。江戸時代の「文学作品のテキスト」の「かなづかい」が屋名池誠(二〇一一)の指摘のような状況であるとすれば^④、それに先立つ室町時代をどのようにとらえればよいか、という観点から考えを進めていくことにする。

『横笛物語』冒頭五丁において、同じ語が異なる書き方をされている例は以下のとおり。「／」は改行を示す。

〔助詞エ〕

1 女院の御所多まいり

2ウ1

2 から／かきほのうちゑいり

2ウ2

3 いつそや女院／ゑ御つかひにまいりて

3ウ1

4 女院へまいる物にて／候へ

3ウ8

5 女院へそまいりける

4才2

6 上ろうへまいらせて此御返事／を取て

5才5

〔助詞オ〕

7 きやうごくの宮／す所をこひたてまつり

1才4

8 人は人おたすけ候へ

5ウ4

〔名詞オモカゲ〕

9 みすをあけてかたるおもかけ

2ウ6

10 を／もかげのまくらにはなれぬ心ちして

3ウ2

〔動詞タマフ連体形・終止形〕

11 かほる大しやうをうみ／たもふ

1才3

12 三がるてんしたまふ

1才6

13 みやこにきこへ／たまふ

1ウ8

14 うちとけかたらせたまふやうは

3才11

15 ことばのすへ／をばしらせたまふべし

4才8

〔名詞ツカイ〕

16 小松との、御つかひに

2ウ1

- 17 女院／ゑ御つかひにまいりて 3ウ 1
- 18 小松殿よりの御つかいに／まいり候へし 5オ 11
- 〔人名ヨコブエ〕
- 19 かるもよこふへとて二人の女あり 1オ 11
- 20 今一人よこふゑは行へをくわしくきくに 1ウ 2
- 21 よ／こふゑさくらかさねのうすきぬに 2ウ 3
- 22 よこふゑがかほうちあがめて御ふみうけとりて 3オ 2
- 23 よこふへとやらんをたゞ一め／みまいらせしより 3ウ 1
- 24 めのとよこふへにあふてしばしは 4オ 3
- 25 よこふへわが身の事とはし／らずして 4オ 9
- 26 よこふゑこれをき、 5ウ 11
- 〔助詞ワ〕
- 27 それげんじ女三の宮はかしわぎの右衛門／のかみ 1オ 1
- 28 これにわいかでまさ／るへし 2ウ 7
- もちろんこの範囲で、同じ語が同じ書き方である例もある⁽⁵⁾。
- 〔動詞・名詞コヒ〕
- 29 宮／す所をこひたてまつり 1オ 4
- 30 む／やうのこひのすへなり 1オ 7
- 31 見るこひきく戀うら／むこひあふてあはぬ戀 1オ 7

32 こひせばやせぬべしとうら／みたまひけるとかや 1才9

33 わがこひの／したにこがれて 4ウ5

〔動詞タマフ連用形〕

34 右衛門／のかみになれたまひて 1才2

35 うら／みたまひけるとかや 1才10

36 つく／くと／あんじたまひ 2才5

右においては、発音「イ・ウ・エ・オ・ワ」に関して、書き方が複数あることがわかる。多くの文献において「へ」「を」「は」で書かれる助詞「エ」「オ」「ワ」を「ゑ」「お」「わ」と書いていることが示すように、右は「古典かなづかい」的に書かれていないとみることができ、濁点をかなり施していることも「古典かなづかい」的でないこととの現われであると考えられる⁶。「古典かなづかい」的でないことが、すぐにそのまま「表音的」ということにはならないと考えるが、今ここでは便宜的に「表音的」という表現を使うことにする。そうすると、右は「表音的」な書き方を採っていることになる。「表音的」とはかつてどう書いていたかではなく、今どう発音するかをよりどころにして書くということでもある。「表音的」であることを徹底させれば、かつてどう書いていたかを否定することにつながる。しかし、そこまではしなかった場合、つまり、かつてどう書いていたかを否定しなかった場合は、「かつての書き方」と「表音的な書き方」の両方が混在し、書き方が複数存在することになる。つまり、右のような書き方は、「かつて」の完全な否定ではなく、「かつて」に「今、ここ」が混在することを忌避しない書き方とみることができる。それは自然ななりゆきといえるのではないか。

「かつて＝伝統」、「今、ここ」＝現実・実際」ととらえるとかかなり粗いとらえかたになるが、仮にそうみた場合、「伝

「統」と「現実・実際」のどちらを選択するかということではなく、「伝統」に「現実・実際」を滑り込ませた、そういう意味合いにおいて「実際のな」書き方とみえる。

屋名池誠（二〇一一）が採りあげた「近世の戯作」ほどではないにしても、室町末期の書写と目されている「横笛物語」にも「多表記性表記システム」と呼べるような書き方が看取された。こうした書き方は古代語の時代に書写された文学作品テキストにはほとんどみられない。そうであれば、このことがらをめぐっては、中世語と近代語とは「連続」していて、古代語とは連続していないことになる。つまり、「多表記性表記システム」が採られる時代と採られない時代ということによって、古代語と近代語とが分かれることになる。これは現時点では「仮説」ということになるが、今後この「仮説」がどの程度の確かさをもっているかについては、検証を重ねていくことしたい。

先に「現実・実際」という表現を使った。語の第一音節の発音によって「いろは」分類をして語を登載している辞書があったとする。「古典かなづかい」で「いぬ」と書く「イヌ（犬）」、「おもり」と書く「イモリ」の第一音節の発音が同じである時期においては、これらの語がかつてどう発音されていたか¹¹「古典かなづかいでどう書かれていたか」を基準にするよりも、今、ここでの発音にしたがって、同じ部に収めてあった方がわかりやすいということになる。しかし「い」も「ぬ」も「いろは歌」に含まれている。そうなれば、どちらかを部としてたてて、ことをやめて、統合するのがよいことになる。これは「現実・実際」に寄り添った対応ということになる。

古本『節用集』と呼ばれる『節用集』の多くは四十四部（稀に四十五部）構成を採る。四十四部構成を採る『節用集』は「ゐ」「お」「ゑ」を部としてたてず、「い」「を」「え」と統合する。だからといって、「ゐもり」を「いもり」と書くという主張をしているわけではないはずで、これは語を検索するにあたって、「現実・実際」の発音をよりどころにしたということである。ここでは「書き方」ではなく語の発音がキーとなっている。語を書くにあたっ

て、これまでどう書いてきたかという「書き方」(の伝統)を重視するという考え方も当然あるが、そうではなくて、今発音しているように書くことを忌避しないという考え方も当然ある。古本『節用集』が四十四部構成を採ったということが、「多表記性表記システム」がいずれうまれることを示唆しているように思われる。

「はじめに」において、「器」とその「外装」という表現を使った。「器」は言語情報を盛り込む「書きことば」としての「器」である。「書きことば」にこれまで盛り込まれてきたよりも、幅広い語が使われるようになる、そもそもその語の「これまでの書き方」がないような場合もある。あるいは「これまでの書き方」では書きにくい語もある。書きことばが多様になったことによって、「古典かなづかい」を軸とした「これまでの書き方」が対応しきれなくなったということが、「多表記性表記システム」がうまれたことの背後にあつたのではないかと考える。

二 連合関係からみた近代

拙書『連合関係』(二〇一一年、清文堂出版刊)において、「発音と語義双方に共通性がある場合、語義のみに共通性がある場合、発音のみに共通性がある場合、をひとまずは中核とし、それ以外に、何らかの連想によって想起される場合、をも含めて、「連合関係」という概念をとらえることにする」(十四頁)と述べた。「連合関係」の定義としては右の引用に従いたい、ここでは、「語義のみに共通性がある場合」に限定して、考えを進めていくことにする。「室町時代以降一九四五年までの日本語」つまり近代語において、同じような連合関係が成立していることを提示してみた。

古本『節用集』の一本と位置づけられている「和漢通用集」は寛永頃の書写と目されているが、ほぼすべての見出し項目に語釈が施されており、古本『節用集』においては「異色」といってよい。この「和漢通用集」を分析対象としてみる。

まず、辞書の枠組みをひろく「見出し項目」とそれに対する「語釈」と考えることにする。「語釈」は「見出し項目」の語義やその他の説明であるとまずは考えられる。ここから先において採りあげる辞書においては、「語釈」を記述するスペースが物理的に限られており、その限られたスペースの中で、的確にまた簡略に語義を説明する必要がある。語Aの語義を簡略に説明するためには、「言い換え」にちかい説明がまずは考えられる。語Aの「言い換え」になる語Bは、そもそも語Aと結びついている語であると考えられる。それが、AといえはすぐにBが思い浮かぶということであるとすれば、「連合関係」にある語といってよい。

ある見出し項目に対して「和漢通用集」が与えている語釈とほぼ同様の語釈が、「和漢通用集」が編まれた時期からずっとくだった明治期に編まれた漢語辞書にみられることを指摘したい。それはつまり、「和漢通用集」が編まれた時期に成り立っていた連合関係が、明治期にも成り立っていたということを示すことになると考ええる。

「和漢通用集」では見出し項目や語釈の漢字に振仮名が施されていることが少なくないが、引用にあたって、振仮名は丸括弧に入れて示すことにする。上段が「和漢通用集」で、下段は、明治十五年に刊行された漢語辞書『文明いろは字引』（増補版）である。『文明いろは字引』においても、見出し項目となっている漢語に振仮名が施されているが、これは原則として省いて引用した。

1	怠慢（たいまん）おこたる也（夕部）	怠慢	ヲコタル	49	オ5
2	零落（れいらく）おちぶる、也（レ部）	零落	オチブレル	51	ウ7
3	存外（ぞんぐわい）おもひの外也（ソ部）	存外	ヲモヒノホカ	56	オ4
4	半（なかば）はん分（ナ部）	半分	ナカバ	12	オ4
5	濫觴（らんしやう）始之義（ラ部）	濫觴	ハジマリ	60	ウ6

6	約諾 (やくだく) やくそく也 (ヤ部)	約諾	ヤクソクシテウケアフ	68	オ10
7	權勢 (けんせい) 同義 時のいせい (ケ部)	權勢	ケントキセイト	71	オ6
8	教訓 (けうくん) おしゆる也 (ケ部)	教訓	ヲシユル	71	オ6
9	懇切 (こんせつ) ねんごろ也 (コ部)	懇切	同上 ネンゴロニマコト	83	オ10
10	遠慮 (ゑんりよ) 思案 (エ部)	遠慮	トホキシアン	86	オ5
11	叡覽 (ゑいらん) 天子の御覽也 (エ部)	叡覽	天子ノゴラン	86	オ8
12	永代 (ゑいたい) 末代也 (エ部)	永代	同上 マツゴマツタイ	86	ウ10
13	超過 (てうくわ) こへ過る也 (テ部)	超過	コヘスギル	90	の 100 オ4
14	哀憐 (あいれん) 人をあはれむ也 (ア部)	哀憐	アハレム	102	オ8
15	呬 (さ、やく) 耳語也 (サ部)	耳語	(じご) サ、ヤク	120	ウ1
16	仰天 (ぎやうてん) おどろく也 (キ部)	仰天	オドロク	114	ウ10
17	虚誕 (きよたん) うそ也 (キ部)	虚誕	ウソ	113	ウ10
18	宥免 (ゆうめん) ゆるす也 (ユ部)	宥免	(いうめん) 同上 ユルス	5	ウ6
19	名譽 (めいよ) 人のほまれ也 (メ部)	名譽	ホマレ	117	オ2
20	免許 (めんきよ) ゆるす也 (メ部)	免許	ユルス	117	ウ4
21	赦免 (しゃめん) ゆるす也 (シ部)	赦免	同上 ユルス	132	オ3
22	至極 (しごく) きはまり也 (シ部)	至極	キハマリ	122	オ8
23	愁嘆 (しうたん) うれいなげく也 (シ部)	愁歎	ウレイナゲク	132	ウ4
24	披閱 (ひゑつ) ひらき見る也 (ヒ部)	披閱	同上 ヒラキミル	140	オ4

「近代（日本）語」をめぐって

41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30		29	28	27	26	25
會合（くわいかう）より合（ク部）	和睦（くわぼく）中なをり也（ク部）	濫觴（らんしやう）始之義（ラ部）	零落（れいらく）おちぶるゝ也（レ部）	大略（たいりやく）大かたの義（タ部）	往古（わうこ）むかし也（ワ部）	忠勤（ちうきん）ちうせつをつとむる也（チ部）	恥辱（ちじよく）はぢなり（チ部）	平生（へいぜい）つね也（ヘ部）	別離（べつり）わかれ也（ヘ部）	忘却（はうきやく）わするゝ也（ハ部）	音信（いんしん）おとつれ也（イ部）	明治二年に刊行された漢語辞書、『漢語字類』との対照も示しておくことにする。	睡眠（すいめん）ねむる也（ス部）	推問（すいもん）おしてとふ也（ス部）	静謐（せいひつ）しつかの義（セ部）	誹謗（ひはう）そしる也（ヒ部）	披見（ひけん）同義ニひらき見る也（ヒ部）
會合（くわいがふ）ヨリアフ	和睦（わぼく）ナカナオリ	濫觴（ハジマリ）	零落（ヲチブレル）	大略（上二同ジニオホカタ）	往古（ムカシ）	忠勤（ジツイニツトメル）	恥辱（ハヂ）	平生（ツネフダン）	別離（ワカレ）	忘却（ワスレル）	音信（オトツレ）		睡眠（スイミン）ネムル	推問（オシテトフ）	静謐（シツカ）	誹謗（ソシル）	披見（ヒラキミル）
37オ4	25オ7	58ウ2	130オ6	28ウ3	5オ4	38オ1	38ウ5	4ウ7	17オ5	37ウ6	133オ6		153ウ6	152ウ6	150オ7	139ウ10	140オ4

42	権柄(けんへい) 時のいせい(ケ部)	権柄 上二同ジ イセイ	52オ7
43	権勢(けんせい) 同義 時のいせい(ケ部)	権勢 イセイ	52オ6
44	懇切(こんせつ) ねんごろ也(コ部)	懇切 上二同ジ ネンゴロ	40オ5
45	叡感(ゑいかん) 天子の御感也(エ部)	叡感 天子ノギヨカン	23オ1
46	叡覧(ゑいらん) 天子の御覧也(エ部)	叡覧 天子ノゴラン	22ウ6
47	虚誕(きよたん) うそ也(キ部)	虚誕 上二同ジ ウソ	93オ6
48	消息(しょうそく) おとづれ也(シ部)	消息 オトヅレ	57オ1
49	寂寥(せきれう) 同義 さびしき也(セ部)	寂寥 モノサビシ	30ウ6
50	静謐(せいひつ) しつかの義(セ部)	静謐 上二同ジ シツカ	131オ4

明治期に刊行された漢語辞書が見出し項目として採用する漢語と、「和漢通用集」が見出し項目とする漢語とは、そもそもそれほど重なるわけではない⁽⁸⁾。「メンダン(面談)」は「和漢通用集」においては、見出し項目となっているが、『漢語字類』では見出し項目となっておらず、「メンリン(面稟)」の語釈となっている。これは「メンダン(面談)」が「和漢通用集」においては、見出し項目となるような、説明が必要な漢語であったが、『漢語字類』が編まれた時期までに、「メンダン(面談)」が「漢語を説明するような漢語」になっていたことを示している。見出し項目が重なるということは、当該漢語が室町期から明治期まで継続して使われていたことをまずは推測させる。そして、その語釈がほぼ一致しているということは、当該漢語の語義の理解、説明のしかたが同じであるということである、それは当該漢語と結びつきを形成していた語がほぼ一致しているということである⁽⁹⁾。

こうした結びつきは明治期に刊行された、いわゆるボール表紙本にも見出す事ができる。右に掲げていない例を

使って説明する。「和漢通用集」には「支度（したく）用意也」（シ部）とある。たとえば『緑林門松竹』（明治二二年刊）には「是れから用意が整ひおせきは駕籠に乗込んで出かけました」（九二頁二行目）とあり、漢語「シタク」に漢字列「用意」をあてている。こうした書き方ができるのは、漢語「シタク（支度）」と漢語「ヨウイ（用意）」とが語義を媒介にして結びついているからと考えられる。あるいは『和漢通用集』に「嫉妬（しつと）愠気（りんきど）同義」とある。『噂高倉』（明治二二年刊）には「嫉妬の當こすりと思はれてはならんさかい」（一一七頁一行目）とあって、漢語「リンキ（愠気）」に漢字列「嫉妬」をあてている。また『和漢通用集』には「莞尔（にっこり）わんじ）笑也」（二部）とあるが、『噂高倉』には「莞示笑って手に手を取り」（三十九頁五行目）とみえる。「示」字はあるいは誤植か。「和漢通用集」に「相違（さうい）物のちがふ也」（サ部）とあるが、『噂高倉』には「彼奴がころしたに相違をまへん」（一三五頁）とある。

「和漢通用集」に「不審（いぶかし）ふしん也 未審（同）同義」（イ部）とある。『政治小説佳人之血涙』（明治二十年刊）には「最と不審く候らふ」（十四頁五行目）とみえる。また「莞爾と打ち笑みつ」（二十三頁八行目）もある。「和漢通用集」に「些少（しやせう）少しの義」（シ部）とあるが、『政治小説佳人之血涙』には「些少は之れを思ひたまひて」（三十三頁二行目）とある。「和漢通用集」には「手段（てだて）武略（ぶりやく）（テ部）とあるが、「脱れ去るべき手段」（四十五頁二行目）とある。「和漢通用集」には「蹠跟（たもろ）猶預（同）（タ部）とあって、「少しも猶預ふ時ならねば」（六十六頁三行目）とある。この『政治小説佳人之血涙』には例として示した「懇切（ねんごう）」（二十二頁四行目）もみえ、例38として示した「零落れ果し」（八十頁十一行目）もある。

振仮名となつている語にどのような漢字列をあてるかということがらを「書き方」の選択として捉えれば、それは表記事象ということになる。しかし、それを「書き方」と捉えた場合でも、「なぜそのような書き方が可能だったか」と考えれば、それは振仮名となつている語Xと、通常その漢字列を使って書く語Yとの語義に重なり合いが

あるからだと考えることができる。この場合は語彙事象とみることになる。ここまで、さまざまな例をあげてきたが、室町末期～江戸初期にかけて成立した「和漢通用集」と、明治期に編まれた漢語辞書あるいは明治期に刊行されたポール表紙本に、同じような、語と語との結びつきが看取されることは、「心的辞書 (mental lexicon)」に共通性があることを示唆しているのではないだろうか。このことについても現時点においては「仮説」に留まるといわざるをえないので、今後さまざまな観点から慎重に検証を重ねていきたい。

おわりに

表記事象と語彙事象とをとりあげて、近代語ということについて述べてきた。表記事象に関しては、室町末期頃から江戸期にかけて「多表記性表記システム」があったのではないかという指摘をした。その背後に、「書きことば」に使われる語彙が古代語とは異なってきたということがあると予想する。

語彙事象に関しては、室町末期頃と明治期とにおいて、同様の「連合関係」が成り立っていることを指摘した。もちろん、室町末期頃と明治期とにおいて、すべての語が同じありかたをしているわけではない。語形も変化するし、語義も変化する。しかしそうした中であって、語と語との、同じような結びつきがあるということが、室町末期頃から明治期までを「共時的」にとらえることを保証していると考ええる。

本稿で述べたことは「論」ではなく「推測的な見通し」であると受け止められるかもしれない。しかし、具体的な文献に密着していれば実証的な「論」ということになるわけでもないと考ええる。理論的な枠組みに基づいて言語事象を鳥瞰するということはつねに必要であろう。「室町時代以降一九四五年まで」を近代語の時代と考えた時、この時期に書かれた文献は、古代語の時代と比較にならないほど多いことはいうまでもない。そうしたことを反映して、さまざまな文献についての分析が蓄積されてきている。そうした分析を適切に整理し、今後どのような方向

に進むべきかということを考える時期にきているように思われる。
注

- (1) 拙稿「書き手の意識」（『国語文字史の研究 八』二〇〇五年、和泉書院刊）は、複数の人物（A・B）によって書写されている、天理図書館蔵『あさぢが露』を分析対象として、「相違点」のすべてがAもしくはBの積極的な「書写意識」に基づくとは考えにくい。AもしくはBが意識して自分なりの書き方を導入して書写したという証はどこにもない。共通点の幾つかはこうした（文学作品の）書写などに習熟した者であれば誰しもが行ない得る書き方であったはずで、それを特定の人物に結びつけてあたかも「創意工夫」のように評価する必要はないように思う」（八二頁）と指摘している。
- (2) 『影印室町物語集成』第一輯（一九七〇年、汲古書院刊）を使用した。
- (3) 五丁に限ったのは、後にふれる屋名池誠（二〇一一）が「近接位置」（一六二頁）で異表記が出現することに着目していることと考察における平行性を保つためである。
- (4) 屋名池誠（二〇一一）は滝沢馬琴『椿説弓張月』（一八〇七年前編刊）を観察し、「同時期であってもジャンルや作者によって表記面の安定に対する志向の度合にちがいがあはれない」（二六一頁）と述べる。日本語の書き方にはそもそも選択肢があり、また「話しことば」とは異なり、「書きことば」は後天的に修得されることを考え併せれば、その運用能力に個人差があることは原理的に認められる。そのことからすれば、芭蕉の「かなづかい」はこんな傾向で、西鶴の「かなづかい」はこんな傾向であるという指摘は、「情報」としては有用であろうが、といって、江戸時代に生まれ育った人物すべてについて「かなづかい」を調査する必要はないことは自明のことであろう。大枠を視野に入れない「かなづかい」分析は積極的な意義をもちにくいと考える。
- (5) 例31「見るこひきく戀うら／むこひあふてあはぬ戀」においては、「コイ」が平仮名で「こひ」と二度書かれている一方で、漢字によって二度「戀」と書かれている。したがって、「コイ」という語は、仮名では同じ書き方がされているが、別の書き方として漢字によって「戀」と書かれていることになる。ある語を漢字によって文字化すれば、そもそも「かなづかい」が問題にならない。そのことからすれば、漢字書きも視野に入れて「かなづかい」を考えるべきであるが、ここでは、仮名で書く場合に観察、考察を絞っている。

(6) 拙稿「が」という仮名(清泉女子大学『言語教育研究』第三号、二〇一一年)において、「濁音は特別な場合以外は示さないのが、日本語の表記のずっと続いてきた「流れ」であり、したがって、狭義の「かなづかい」にはもちろん濁点使用は含まれていない」(三九頁)と述べた。また拙書『かなづかいの歴史』(二〇一四年、中公新書)においても、「濁点は「かなづかい」ということには含まれていないとみたい」(二五八頁)と述べた。

(7) どうしても区別をしたい「お」から始まる語と「を」から始まる語とを「今、ここ」での発音(＝アクセント)によって分けるというやりかたも発想としては共通していると考ええる。

(8) また同じ漢語であっても、室町末期と明治期とでは、語義が異なる場合も当然ある。

(9) 本稿では、中世末期頃に成立した古本『節用集』の一つとして位置づけられている「和漢通用集」と明治期に刊行された漢語辞書である『文明いろは字引』の見出し項目と語釈との結びつきの共通性について述べた。このことに関してあるいは「辞書間には前後関係とともに直接・間接の影響関係が存在することが多い」から中世末期と明治期とに成立した辞書間に「こうした影響関係があれば、漢語と語釈の「連合関係」が多々受け継がれることは当然であり、両期「心的辞書」の共通性の根拠とすることはできない」という反論(以下反論1と呼ぶ)がなされるかもしれない。あるいはまた「ボール表紙本類の漢字列と振り仮名に見られる連合」関係「にも背景にこうした近世辞書類参照の影響が存在する可能性がある」という反論(以下反論2と呼ぶ)がなされるかもしれない。そうした反論がなされたらと仮定して、本稿での稿者の主張を明確にするという目的で、その仮定した反論について稿者の考えを述べておきたい。まず反論1について。これまでに「和漢通用集」がここで採りあげた明治期の漢語辞書に影響を与えたという言説に稿者はふれたことがない。もちろんそうした可能性がゼロとはいえないだろうが、その可能性をつねに考えなければ発言ができないのだとしたら、明治期の漢語辞書についての研究はいつまでたってもできないことになりはしないか。類似の言説はこれまでもなされるのが少なくない。そしてそうしたみかたについての稿者の考えも、何度か表明してきた。そのことからすれば、「みかた」の相違ということになるが、しかし、過去に編まれた辞書体資料すべての影響関係を確認することなどできないのであって、そうした「潔癖性」を求めることは現実的ではないし、その「潔癖性」によって、これまでなされてきた辞書研究のほとんどすべてが否定されることになるのではないかと考える。反論2についても、同様に考えるが、近世辞書類の影響関係がまったくなくない、ということが証明できるまでは、明治期のボール表紙本の振仮名について、それそのものとして論じることができない、という主張にみえる。そして、「近世辞書類の影響関係がまったくなくない」という証明ははたして可能なのだろうか。稿者などは、こうした「潔癖性」

をつきつめていった果てに、過去の日本語について考えるために使うことができる文献がどの程度残るのだろうかと思ってしまう。

Concerning Modern Japanese Language

KONNO Shinji

Abstract Recalling the researches that have been done on modern Japanese language, attempts were made in this paper to raise two questions. The questions were in regard to the use of Kana and the associative relationship of words. Regarding the use of Kana, a hypothesis was made that the modern language period had a “multi-display writing system,” which did not limit the writing variation of a word to one, but recognized various ways of writing; whereas the ancient language period did not have such a system. Regarding “associative relationship,” a hypothesis was made that the continuity/discontinuity of words can be considered by inspecting whether there is a common relation between the word entry and its explanation in a dictionary. Although both questions raised are hypothetical at the moment, it is hoped that these hypotheses will be examined from various aspects in the future.

Keywords: kana orthography, associative relationship, ancient Chinese